

長恨歌の平仄韻律と現代発音法

A Phonetic Pattern Analysis: The Song of Everlasting Regret

ホノベ・エリック

要約 本稿は漢詩の平仄ひょうそくについてデータ分析を行った。課題は唐代の発音を使わずに現代の北京語と日本語の発音のみで漢詩の平仄を判別できるかである。今回は白樂天の長恨歌を実例にあげる。結果、分析によって一つの顕著な特徴が分かった。普段は現代発音法における例外や旧仮名の使用も多いが長恨歌では例外も旧仮名の使用もほぼ見られなかった。例として「源氏物語」で引用された長恨歌の句に現代発音法を応用する。

キーワード: 漢詩、平仄韻律、音韻論

Abstract. In this paper, we conduct data analysis on tone patterns in ancient Chinese poetry, and focus on whether finding tone patterns always requires the use of ancient Chinese phonetics or whether a combination of modern Chinese and Japanese sounds can suffice for this task. The data sample is a poem by Po Chü-i called The Song of Everlasting Regret. While applying modern sounds to ancient Chinese poetry usually entails many inconsistencies, we find that such inconsistencies almost do not occur in this poem. Further, while historical Japanese orthography is usually necessary for finding tone patterns in ancient Chinese poetry, we find that the use of modern Japanese orthography alone is sufficient for this poem. As an illustrative example, we apply modern sounds to some verses cited in The Tale of Genji by Murasaki Shikibu.

Keywords: Classical Chinese poetry, Chinese tone patterns, Chinese phonology

1. 漢詩のリズム

漢詩は中国だけではなく日本文化の一部でもあると言われている。中国の詩人、李白、杜甫などの漢詩はよく知られているが西郷隆盛の「偶成」、上杉謙信の「九月十三夜」などのような有名な日本漢詩も少なくない。終戦以来の日本では漢詩の教育が衰退したと見られるが漢詩は日本語の表現力をより豊富にするための重要な要素であると思われる(守屋,2007)。

漢詩の学門では韻律だけではなく詩のリズムも非常に重要な概念である。そのリズムは平仄ひょうそくと言う。漢詩では全ての漢字は唐代の中国語の発音によって「平」と「仄」という二つの発音の範疇に分かれている。現代中国の標準語である北京語では唐代の発音と共通点が多い。しかし唐代の一つの声調すなわち、入声にっしょう(次章参照)が失われてしまい北京語の

声調だけで漢字の平仄を判別することができなくなった (Karlgren, 1922)。同時にその入声は遣唐使の時代から日本の漢字音に入り込み戦前の頃までほぼ完全に残った。現在用いられている日本語の新仮名遣では入声の一部分が失われたが漢字の旧仮名は一般の漢和辞典に記載している。また、唐代の四声も一般の漢和辞典に記載されているため全ての漢字の平仄は容易に調べることができる。

本稿はより自然的な観点から漢詩の平仄を再考慮し漢和辞典を一切使用せず現代の北京語と日本語の知識のみでどの程度まで漢詩の平仄を判別できるかという課題に焦点をあてる。以下この方法を現代発音法と称する。

2. 唐代の四声と北京語の四声

唐代の中国語における四つの声調は平・上・去・入声であり、現代の北京語の四つの声調は第一・第二・第三・第四声である。次の表は平仄、唐代の四声と北京語の四声の間の関連を示す。

平仄	唐代の四声	北京語の四声
平	平	一、二
仄	上	三
仄	去	四
仄	入	一、二、三、四

また、北京語の四声に基づいた上記の表を以下に示す。

北京語の四声	唐代の四声	平仄
一	平、入	平、仄
二	平、入	平、仄
三	上、入	仄
四	去、入	仄

上記の唐代の四声と北京語の四声の関連には例外が多い。しかし、多数の場合は北京語の第三と第四声は必ず仄字である。そしてそれ以外の漢字の中から入声の漢字を除くことができれば残る漢字が平字であると見なす事ができる (大島,2009)。

3. 入声にっしょうと日本語の旧仮名遣

唐代の入声にっしょうの漢字は日本の旧仮名遣ではフ・チ・ツ・ク・キのいずれかに終わる。先ず、旧仮名の語尾「フ」の例を挙げる。

語尾：フ

旧仮名	ジフ	ニフ	ガフ	トフ	キフ	エフ	キフ
漢字	十	入	合	答	急	葉	泣

ところが、上記の旧仮名の語尾「フ」以外の「チ・ツ・ク・キ」の語尾の場合は新仮名が旧仮名と変化がないため以下に新仮名で例を挙げる。

語尾：チ、ツ

新仮名	ゲツ	セツ	ハツ	イチ、イツ	ニチ、ジツ	シチ、シツ	フ、フツ
漢字	月	雪	髪	一	日	質	不

語尾：キ、ク

新仮名	ハク	コク	チク	キョク	ギョク	セキ、ジャク	シキ、ショク
漢字	白	國	竹	曲	玉	寂	色

日本語の漢字音で入声にっしょうを判別するため戦前の時まで使用されていた歴史的仮名遣が必要だと分かった。それは語尾の「フ」の漢字 十 入 葉 泣 蝶などがあるからである。ところが「不」の通常の漢字音は呉音の「フ」であるが漢音の「フツ」もあるから語尾の「ツ」とされる。しかし、それ以外の場合は通常の新仮名を使い漢字の入声にっしょうを判別できると言える。

4. 現代発音法で平仄を判別する

上述の北京語と日本語の漢字音の特徴を合わせると以下の現代発音法の三つの決まりに従い多くの漢字の平仄を判別できる。

- ① 北京語の第三・四声の漢字は必ず仄そくど字である。
- ② 日本語の語尾「フ・チ・ツ・ク・キ」の漢字も必ず仄そくである。
- ③ その他の漢字は必ず平ひょうど字である。

白楽天の長恨歌の最初の句「漢皇色を重んじ傾国を思う」を例として上記の決まり①、②、③を応用する。平字を「○」で表記し仄字を「●」で表記する。また、中国語の第一・二・三・四声をローマ字の上に「ˊ」「ˋ」「ˇ」「˘」で表記する。

漢 皇 重 色 思 傾 国 漢 皇 重 色 思 傾 国
Hàn huáng zhòng sè sī qīng guó①→ ● コウ ● ● シケイ コク

漢 皇 重 色 思 傾 国 漢皇重色思傾国
②→ ● コウ ● ● シケイ ● ③→ ● ○ ● ● ○ ○ ●

この例では日本語の漢字音における②の決まりなしでは誤った結果になる。「国」は北京語の第二声であるため③の決まりにより平字とされてしまう。また、②の決まりを厳密に応用するには「皇」などの歴史的仮名も調べる必要がある。ところが、①の決まりを先に応用した為、「色」には「キ」の語尾があることを確認せずに済んだ。それは「色 = sè」は北京語の第四声であるから①の決まりにより必然的に仄字であると既に分かったからである。同様に前章にあった「不」の場合も「不 = bù」は北京語の第四声であるから上述の「フツ」という漢音を知らなくても「不」が仄字であると分かる。

しかし、ここで紹介した現代発音法の整合性は不完全である（石川, 2007）。例えば「眠」は平字であるが、現代発音法では誤った結果になる。「眠」の日本語の漢字音から見ると明らかに入声ではないが北京語の発音「miàn」は第四声であるため現代発音法を応用すると「眠」は仄字とされてしまう。現代発音法の不完全性により漢詩の主な平仄の決まりを判別できないことがある。その一つの決まりは近体詩における「二四不同」である。それは句の第二・四の字は二つの平仄パターンになること：「○●」或いは「●○」。例えば日本でよく知られている漢詩の名句「春眠暁を覚えず」における「二四不同」の決まりを現代発音法で判別の試みをする。

春 眠 不 覚 暁 春 眠 不 覚 暁 春 眠 不 覚 暁
miàn jué ①→ ● カク ②→ ● ● → 不正解

現代発音法では上記の平仄が合わないという誤った結果になった。ちなみに、漢和辞典で唐代の四声を調べてみると「二四不同」の決まりを確認できる。

春 眠 不 覚 暁 春 眠 不 覚 暁
唐代 平 入 → ○ ● → 二四不同 → 正解

本章は現代発音法の整合性が不完全であると確認した。以降は白楽天の長恨歌を事例としてデータ分析を行い現代発音法の不完全性について更に調べる。

5. 長恨歌の平仄

白楽天の長恨歌は絶世の美女「楊貴妃」についての物語である。日本の文学にも影響があり「源氏物語」などに引用されるところもある（近藤,1993）。長恨歌は七言の古詩であり120句あり840字がある。その840字には467の異なる漢字が使用される。その467の漢字に現代発音法を使用すると466の漢字では正解の平仄を判明でき、残りの一つの漢字だけでは正解の平仄を判明できなかった。

5.1 平仄における整合性

上述の一つの例外は第十七句「^ㄨ歡を^ㄨ承^ㄨけ^ㄨ宴^ㄨに^ㄨ侍^ㄨして^ㄨ閑^ㄨ暇^ㄨ無^ㄨく」にある「^ㄨ暇」である。その句に現代発音法を応用する。

承 歡 侍 宴 無 閑 暇 承 歡 侍 宴 無 閑 暇 承 歡 侍 宴 無 閑 暇
huān yàn xián xiá ①→ カン ● カンカ ③→ ○ ● ○○

ここで「二四不同、二六対」の決まりが守られている、即ち「^ㄨ歡^ㄨ宴^ㄨ閑」は「○●○」のパターンに従う。ところが長恨歌は近体詩ではなく古体詩であるためその決まりを守らない句（破格の句）が多い。そして押韻のため、句末の「^ㄨ暇」が平字であれば次の句「春は春遊に従い夜は夜を専らにす」の句末「^ㄨ夜」も平字でなければならない。しかし現代発音法では「夜」が yè と発音し、①の決まりにより仄字である。さらに漢和辞書によると「^ㄨ暇」は平字ではなく仄字であるため長恨歌でも現代発音法の整合性が不完全であると分かる。

5.2 韻律における整合性

現代発音法で正確に平仄を判明できるとしても正確に押韻を判明できるとは限らない。一つの例は第二十三句と第二十四句「姉妹弟兄皆列土を列し、隣れむ可し光彩門戸に生じ」である。

姉 妹 弟 兄 皆 列 土 姉 妹 弟 兄 皆 列 土 姉 妹 弟 兄 皆 列 土
mèi xiōng liè tǔ ①→ ● ケイ ●● ③→ ● ○ ●●

可憐光彩生門戸 可憐光彩生門戸 可憐光彩生門戸

lián cǎi mén hù ①→ レン ● モン●③→ ○ ● ○ ●

上の二つの句では近体詩の決まり「二四不同」や「二六対」が守られていると分かる。即ち第二、四と六の字「妹兄列」と「憐彩門」が「●○○」或いは「○●○」のパターンに従う。更に二つの句の押韻字「土」と「戸」が同じ平仄でなければならないが、それも守られている。しかし「現代発音」では「土=tǔ」は第三声であるが「戸=hù」は第四声であるため押韻が合わなくなる。ところで漢和辞典では「土」も「戸」も韻番三十七の「麌」であるため押韻が守られている。この例では「現代発音」が韻律を確認できないと分かったがここでは平仄には影響がなかった。

同様のもう一つの例は第八十六、八十七、八十八句「其中^{しやくやく}綽約として仙子多し、中に一人有り字は太真、雪膚花貌参差として是なり」である。

其中綽約多仙子 其中綽約多仙子 其中綽約多仙子

zhōng yuē xiān zǐ ①→ チュウヤク セン● ②③→ ○ ● ○ ●

中有一人字太真 中有一人字太真 中有一人字太真

yǒu rén tài zhēn ①→ ● ジン ● シン ③→ ● ○ ● ○

雪膚花貌参差是 雪膚花貌参差是 雪膚花貌参差是

fū mào cǎi shì ①→ フ ● サ● ③→ ○ ● ○ ●

前の例と同様に「二四不同、二六対」の決まりが守られている。即ち第二、四と六の字「中約仙」、「有人太」と「膚貌差」が「○●○」或いは「●○○」のパターンに従う。そして押韻字「子」も「是」も「●」である。しかし前の例と同様に「現代発音」では「子=zi」は第三声であるが「是=shì」は第四声であるため押韻が合わなくなる。ところで漢和辞典では「子」も「是」も韻番三十四の「紙」であるため前の例と同様に押韻が守られている。この例も「現代発音」が韻律を確認できないと分かったが前の例と同様にここでは平仄には影響がなかった。

5.3 旧仮名遣と新仮名遣

長恨歌では漢字の^{にっしょう}入声を判明するため、三つのところでは日本語の旧仮名遣旧の必要があった。それは以下の三つの漢字「合」「入」と「葉」である。

漢字	合	入	葉
新仮名	ゴウ	ニュウ	ヨウ
旧仮名	ガフ	ニフ	エフ

旧仮名を使わずに現代発音法を使用しその三つの漢字の平仄の判明を試みる。

合 入 葉 合 入 葉 合 入 葉
hé rù yè ①→ゴウ ● ● ②③→○ ● ●

新仮名では「入」も「葉」も入声^{にっしょう}であることを判明できないが中国語の第四声であるため仄字であるということを現代発音法で判明できた。「合」の漢字の場合だけでは日本語の旧仮名の必要があった。長恨歌では「合」が現れるところは第百八、百九、百十句「^{でんごうきんさい}鈿合金釵^も寄^{さい}せ^{いっこ}將^{ごう}ち^{いっせん}去^{さい}らし^さむ、釵は^{ごう}一股^{でん}を^{でん}留^{でん}め^{でん}合^{でん}は一^{でん}扇^{でん}、釵は^{でん}黄金^{でん}を^{でん}撃^{でん}き^{でん}合^{でん}は^{でん}鈿^{でん}を^{でん}分^{でん}か^{でん}つ」である。その三つの句のところ以外は旧仮名を使用せずに長恨歌の平仄を正確に判明できる。

全体的に現代発音法では一つの漢字の平仄で誤った結果があった。それは「暇」は仄字であるが現代発音法では平字とされること。更に旧仮名を使用しなければまた「合」の仄字を平字とされる。しかし比率を考えると現代発音法の整合性が強いと言える。

5.4 多音字の平仄

日本語では漢字の意味、文脈や使い方によって音読みや訓読みが変わる時が少なくない。例えば「重」の音読みは「ジュウ」も「チョウ」もあってその訓読みは「おもい」も「かさねる」もある。それは「多音字」と言うが現代中国語にも少なくない。例えば「重」の発音は「zhòng」も「chóng」もある。現代中国語の多音字は唐時代の多音字と完全に一致していると言えない。しかし現代発音法を使用し長恨歌の多音字の平仄を正確に判明できた。上述の例「重」は第一句「漢皇色を^{じゅうん}重^{じゅうん}んじて傾国を思う」にあって「おもんじる」と読む。また第百十三句「別れに臨んで^{いんぎん}殷勤^{いんぎん}に重ねて詞を寄す」にあって「かさねる」と読む。現代発音法を使用し平仄を判明する。

漢 皇 重 色 思 傾 国 漢 皇 重 色 思 傾 国
huáng zhòng sè qīng guó ①→ コウ ● ● ケイコク

漢皇重色思傾国 漢皇重色思傾国

② → コウ ● ● ケイ ● ③ → ○ ● ● ○ ● → 正格

第一句では「二四不同、二六対」の決まり守られている。即ち第二、四と六の字「皇色傾」が「○●○」のパターンに従う。そして「重=おもんじる」を正確に「●」とされる。

臨別殷勤重寄詞 臨別殷勤重寄詞

bié qín chóng jì cí ① → ベツ キンジュウ ● シ

臨別殷勤重寄詞 臨別殷勤重寄詞

② → ● キンジュウ ● シ ③ → ● ○ ○ ● ○ → 正格

第一句と同様に第百十三句では「二四不同、二六対」の決まり守られている（正格）。即ち第二、四と六の字「別勤寄」が「●○●」のパターンに従う。そして「重=かさねる」を正確に「○」とされる。上述の二つの例と同様に長恨歌の他の多音字（例えば「思う」=「○」、「思い」=「●」など）も現代発音法で正確に判明できると見られる。

5.5 対義字の平仄

長恨歌の対義字の中では互いに異なる平仄が幾つかあると見られる。それに現代発音法を応用する。

多少	長短	寒暖	遅早	新旧	前後	来去	昇落
duō shǎo	cháng duǎn	hán nuǎn	chí zǎo	xīn jiù	qián hòu	lái qù	shēng luò
朝暮	分合	男女	兄弟	逢別	天地	生死	無有
cháo mù	fēn hé	nán nǚ	xiōng dì	fēng bié	tiān dì	shēng sǐ	wú yǒu

① →

多少	長短	寒暖	遅早	新旧	前後	来去	昇落
タ ●	チョウ ●	カン ●	チ ●	シン ●	ゼン ●	ライ ●	ショウ ●

朝暮	分合	男女	兄弟	逢別	天地	生死	無有
チョウ ●	ブンガフ	ダン ●	キョウ ●	ホウベツ	テン ●	セイ ●	ム ●

②→

分合 逢別
ブン● ホウ●

③→

多少	長短	寒暖	遅早	新旧	前後	来去	昇落
○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
朝暮	分合	男女	兄弟	逢別	天地	生死	無有
○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●

現代発音法では上記の対義字の平仄が正確に判明された。

5.6 長恨歌と源氏物語

白楽天の長恨歌は中国ともかく古くから日本で有名であって源氏物語への影響も大きいと知られている。本稿は源氏物語で引用されている三つの句を紹介しその句の平仄を現代発音法で判明する。

長恨歌： 太液の芙蓉 未央の柳（第八十九句）

源氏物語：太液の芙蓉、未央の柳もげにかひたる容貌を（桐壺）

長恨歌： 夕殿 螢飛んで思い悄然（第百四句）

源氏物語：螢が多く飛びかうのにも夜を知る螢を見ても悲しきは時ぞともなき
思ひなりけり（幻）

長恨歌： 旧き枕故き衾 誰と与共にかせん（第百十一句）

源氏物語：旧き枕故き衾、誰とともにか（葵）

上記の第百十一句は「翡翠の衾は寒くして誰と与共にかせん」に作るものがあるため両方の句の平仄を判明する。

太	液	芙	蓉	未	央	柳	太	液	芙	蓉	未	央	柳
yè	róng	yāng					①→	●		ヨウ			オウ

太 液 芙 蓉 未 央 柳

②③→ ● ○ ○ →破格

夕 殿 蛩 飛 思 悄 然 夕 殿 蛩 飛 思 悄 然

diàn fēi qiǎo ①→ ● ヒ ●

夕 殿 蛩 飛 思 悄 然

②③→ ● ○ ● →正格

旧 枕 故 衾 誰 与 共 旧 枕 故 衾 誰 与 共

zhěn qīn yǔ ①→ ● キン ●

旧 枕 故 衾 誰 与 共

②③→ ● ○ ● →正格

翡 翠 衾 寒 誰 与 共 翡 翠 衾 寒 誰 与 共

cùi hán yǔ ①→ ● カン ●

翡 翠 衾 寒 誰 与 共

②③→ ● ○ ● →正格

「二四不同、二六対」の決まりが守ら第百四句と百十一句では守られている（正格）が第八十九句では守られていない（破格）。

6. 結論

漢詩の平仄韻律は漢文学の重要な概念である。終戦以来は漢文の教育が衰退してきたと見られ、現在の日本の高校の教科書では学門としての漢詩はあるがその平仄韻律についてはほとんど記載されていない。恐らく漢和辞書で平仄韻律を調べることは重要視されず、又興味を持っていない人々が多いのではないであろうか。しかし、実は奈良時代から現在まで日本漢詩を創った文人の数は多い。例えば、近代の文学者、夏目漱石、森鷗外、中島敦などの有名な漢詩は多く、江戸時代の思想家、頼山陽の漢詩は現在も詩吟として愛吟されている。その大多数の日本漢詩では平仄韻律の様々な規律（二四不同、二六対など）が厳しく守られていると見られる。小稿で分析した現代発音法を通じ平仄韻律を身に付ければ先人が創った日本漢詩を更に深く鑑賞できるであろう。

小稿は白樂天の長恨歌における平字と仄字を分析した。漢和辞書を使用せずに現代中国語と日本語の発音のみで詩のほとんどの漢字の平仄を正確に区別できた。例外はただ一つ「暇」の漢字であった。更に日本語の歴史的仮名遣いを使用せずに現代仮名遣いのみで詩のほとんどの入声^{にっしやう}を正確に特定できたとと言える。例外の三つの漢字「合」「入」「葉」であったが「入」と「葉」が現代中国語の発音で仄字であると判明できるため歴史的仮名遣いが必要であるのはただ「合」の漢字の場合であった。詩の総合の四百六十七の漢字の中の二つの漢字の例外は極めて少ないと考えられる。

楊貴妃と白樂天の長恨歌が中国はもとより日本でもよく知られている。小稿で分析した現代発音法を応用し新たな観点から長恨歌を鑑賞することによって、人々の間で平仄韻律への関心が高めれば幸いに存じる。

参考文献

- 石川忠久. (2007). 『漢詩を作る』. 大修館書店.
大島 正二. (2009). 『唐代の人は漢詩をどう詠んだか』. 岩波書店.
近藤春雄. (1993). 『長恨歌と楊貴妃』. 明治書院.
守屋 洋. (2007). 『日本語力がつく漢詩』. 角川出版.
Karlgrén, B. (1922). The reconstruction of Ancient Chinese. *T'oung Pao*, 21, (pp.1-42).

Received on Nov. 17th, 2011.